

## 2010年春学期レポート

### 履修クラス

#### 1) 英語リーディング

昨学期に引き続き、大学進学のために必要なリーディングスキルを教わった。生徒はろう学生のみ、15人ほど。先生は聴者、手話で話す。昨学期に学んだスキルを使って複数の長文を読解し、それらに共通する要点をみつけ、まとめるスキルを学んだ。

#### 2) 英語ライティング

今学期とったクラスは昨学期受けていたクラスからレベルアップしたクラスである。30人ほどのメインストーリーミングクラスで、手話通訳2名と、リアルタイムキャプショナー(PC通訳)1名を介して受けた。このクラスは主に討論型エッセーの書き方を習うクラスであるが、昨学期受けていたクラスよりもさらに具体性のあるエッセーが求められ、多くの資料収集が必要とされた。引用したり・参考にできる文献も書籍や、政府や大学などのオフィシャルホームページなどに限られている(誰でも編集できるウィキペディアはもちろん不可)ので、リサーチに時間がかかったが、どのように自分のテーマに沿った資料を見つけるのか学ぶことができたし、より内容の深いエッセーに仕上げることができた。

#### 3) 統計学

50人ほどのメインストーリーミングクラスで、通訳2名を介して受けた。ノートテイク付き。Excelを使ってデータを数量的に表すスキルを学ぶ。専門用語も去年受講した数学とは桁違いの多さで、問題文も文章問題ばかりなので語学面で四苦八苦した。さらに、一度習ったものがまた後になって他の章でレベルアップして出てくることが多く、一つ一つをしっかりと理解せず、中途半端なまま次の章に進むと、先生の説明が理解できずかなり遅れをとってしまうので先生に聞いたり、予習復習をしっかりとやるよう心がけた。それでも、今まで知らなかったExcelの機能を学ぶのはとても新鮮で、楽しみながら学期を終えることができた。身に付けたスキルをこれからもあらゆる面で活用していきたい。

#### 4) 一般心理学

40人ほどのメインストーリーミングクラスで、通訳2名を介して受けた。ノートテイク付き。心理学と聞いてカウンセリングスキルを身につけるのかと思っていたのだが、そうではなく、脳・神経の仕組みを中心に学んだ。

言語習得のプロセスについて学んだ際に、驚いたことがあった。使ったテキスト(第7版 Exploring Psychology / David G. Myers 著)にろう者のことが所々に書かれてあったのであ

る。言語とは「話し言葉、書き言葉の他に手話も含む」と定義し、さらに、幼少期(7歳ほどまで)に音声言語や手話言語に触れずに育った子どもは、その後言語を習得することが困難である、として幼少期のコミュニケーション環境は言語習得能力を左右することを強調していた。さらには、今日野球で使われている「セーフ」「ストライク」「アウト」のサインはアメリカのろうのメジャーリーガーによって発案されたということも書かれていた。心理学入門で学ぶとは思わなかったので目からうろこだった。先生(聴者)も言語について話す際はいつも「手話も言語である」と説明していた。それだけアメリカでは手話は言語として広く認識されているということに気づかされた。

## ノートテイク

今学期初めてノートテイクをお願いしたのだが、アメリカと日本ではノートテイクの意味が違うことを知った。日本ではテイカーはろう学生の隣に座り、先生の発言を要約してノートに書き、ろう学生に伝えるのに対し、アメリカは板書をノートに写すのがほとんどである。つまり、『ろう学生は手話通訳・文字通訳から目が離せない→板書が写せない→ノートテイカー提供』ということだ。テイカーはクラスメイトで、毎クラス終了後にコピーをくれる(コピーは学生支援センターでコピー、またはカーボン用紙使用)。ノートテイクを要望したおかげで、通訳を見落とすことが少なくなった。

## 春学期を終えて

フリーモントでの生活も早10ヶ月が過ぎ、土地勘もついてきて、生活にもすっかり慣れた。昨学期と比べて宿題の量やひとつひとつの宿題や復習にかかる時間が増えた。心理学と統計学は毎月テストがあり、復習しなければならない範囲が広く、宿題をこなしながらのテスト勉強はとても苦労した。それでも今まで触れたことのない新しい分野について学ぶことができ、充実した春学期だった。

学期後半はクラスが終わったあとは学校の図書館やパソコン室でひたすら宿題をしたり、テスト勉強に励んだ。週末は気分転換に友人と近所の図書館やカフェで勉強したりした。期末テスト前は1学期分の復習が十分にできず、徹夜をしたりと生活リズムを崩してしまい、軽く風邪をひいてしまった。やはり規則正しい生活は大切だと痛感させられた。